

1 次の文章を読んで、あとの問1から問5までの問いに答えなさい。

1 辞典の読者と辞典編集者とが行き違うことがあるとすれば、一番の理由は、おそらく、ことばの正しさについて、辞典読者が辞典編集者よりずっと樂天的だという点にあると思われます。

2 古典文学などに現れて以後まったく使われないようなことばでなく、現代社会の中で生きていることばであれば、今に至るまでに必ずなんらかの変化を受け、また今も変化し続けている——いささかでもことばを観察すれば、それは明らかです。その変化とは、もとの意味・用法からの逸脱です。それを「乱れ」と呼ぶのであれば、ことばはいつも乱れています。しかし、^①ことばの正しさとはいつの時点での姿をいうのでしょうか。今の日本語は乱れているから、奈良時代のことばに戻れ、とおっしゃる方はいません。現在から見て少し過去のあたりの日本語を「正しい」として、そこからの変化を乱れとして嘆かれるのです。

3 ことばが絶えず変わっていることを、辞典編集者は仕事柄忘れることができません。しかし、辞典を使う方は時折それに気づいては、不快に思ったり怒ったりされるのです。変化することこそ通常のあり方であることばについて、辞典が忠実であろうとすれば、現時点でおおぜいが使っていることばをそのままに記述し、「A」変化してきた経過について言及する、といった姿勢をとるほかにはありません。

4 辞典を使われる方が「正しい日本語を」と言われる内容は、「変化」

「乱れ」を抑えようということのほか、実は、もう一つあるようです。それは、ことばの意味はいつも「正確」「厳密」であるべきだ、とすることです。正しいことば（単語）は、いづどんな場面においても、きちんとその単語に対応した普遍かつ不変の意味領域をもつべきだ、とでもいうような信仰です。そのような深い信仰心をもつ方は、辞典に「正しい日本語」というよりは「厳密な定義」を要求されるのです。「辞典はことばを定義するもの」とおっしゃる方もいますが、それは違います。国語辞典はことばの意味を記述しますが、定義はしません。

5 老人とは厳密には何歳からをいうのか、未明は何時から何時までか、岩と石と砂、あるいは湖と沼と池とはどう定義されるのか。そこを厳密にしたからといって、日々の生活が特に変わることもないという問題が大半ですが、気になると、きちんとしないではいられなくなるものなのです。電話でいきなり「夜中に目付が変わる瞬間は、今日の内に入るのか、翌日か（十二時か零時か）」などと聞かれると、とっさに何のことかとまどろみですが、辞典編集部にこうした問い合わせは少なからずあります。徹底的に厳密にしたいのであれば、すべて定義づけたことばだけで、その定義が通用する閉じた世界の中で生きるほかないのですが、厳密屋さんはそうしたことが可能だと思っておられるようなのです。

6 定義というのはある特定の世界の中での約束のことです。このこと

ばはこういう時にこういう意味で使うことにしましょうという取り決めにほかなりません。私たちは時としてその世界の中で会話することもあります、いつもはもつと広いのびのびとしたところで、特別に約束をしたこともないことばを使って、感じたり考えたり表現したりしています。そのことばを、人工言語に対して自然言語ということもあります。一般の国語辞典はその自然言語の辞書なのです。一方、ことばを定義している辞書は専門分野の事典や用語集に見られます。先の「老人」について、普通の国語辞典は「年とつた人。年寄り。」くらいしか書いてありません。何歳から、などという明確な取り決めは自然言語にはありません。それは、行政上の都合とか統計をとる便宜とかのために役所や法律が、例えば「老人福祉法」では六十五歳以上を老人とする、と決めただけのものであつて、「老人」の意味ではありません。にもかかわらず、老人ということばの意味が曖昧だなどということは無いのです。老人の語は、さまざまな場面でさまざまな対象（人）を指すことが可能ですが、その対象（人）をどう捉えようとしているか、それらに向けた視線の方向は共通で、多くの人々に共有されているのです。^②対象を捉えようとして向けた視線、その向きがことばの意味というものであらうと思うのです。

7 「砂」は、『広辞苑』によれば、「細かい岩石の粒の集合。主に各種鉱物の粒子から成る。通常、径二ミリメートル以下、十六分の一ミリメートル以上の粒子をいう。」とあります。岩石学ではこのように取り

決めているのですが、それが「通常」かどうかは疑問です。そんな数字を知らなくても、物差しを持ち合わせていなくても、私たちは日常の場で即座に石か砂かを判別し、何の支障もなく会話することが出来ます。投げるのは石、砂はまく。時として石にはつまずき、また砂をかむ思いもするでしょう。ことばが表す世界は思いのほか広くて、がちがちの定義では捉えきれないふくらみをもっているものです。

8 日常普通に使っている日本語なのに、ふと自信がもてなくなつて、辞書で意味を確かめるということがあります。それに答えるのが辞書の仕事です。しかし、そこで辞書の記述が不満だとして、とたんに「正確」で「厳密」な定義の方向に向かつてしまう方がおられるのが残念ではありません。「厳密」がことばとして正しいとは限らないのです。例えば、天気予報や新聞の報道では、「未明」を「午前零時から午前三時頃まで」と決めています、未明の語の本来の意味（まだ夜が明けきらない頃、明け方）に比してずいぶん早過ぎはしないでしょうか。厳密にいうとめと称して、正しい意味を壊してしまつてよいはありません。

（中略）

9 ことばについて、こうなくてはならぬという一つだけの正解がないと同時に、絶対的な間違いということも非常に少ないものです。ことばはそんなやわなものではない。ある制約がありながらも、その中で自由にできる余地のことを、「遊び」とか「はば」とかいうことがあります。ことばには「はば」があるのです。

(注)

○ 1 9 は段落符号である。

○ 逸脱^{いだつ} $\parallel$ されること。

○ 便宜^{えんぎ} $\parallel$ 都合のよいこと。

○ 『広辞苑^{こうじえん}』 $\parallel$ 国語辞典の一つ。

2 次の問1、問2の問いに答えなさい。

問1 次の文中の傍線部のカタカナを漢字で書きなさい。

読まなくなった本を整理し、棚にシェウノウした。

問2 次の文中の傍線部に用いる漢字を、あとのアからエまでの中から

選んで、そのかな符号を書きなさい。

③ 窓には、通風やサイ光の役割がある。

ア 済 イ 裁 ウ 催 エ 採

3 次の文章を読んで、あとの問1から問6までの問いに答えなさい。

1 一言でいえば、自分という弱くて小さな存在を、世界という途方もなく大きいものにしなやかにつなぐ方法を探すのが、この本の目的である。そもそも本来はすべてのテクノロジーが、世界と自分をつなぐためにスタートしたはずである。リスボン大地震（一七五五年）以降の近代テクノロジーは、その目標達成のために、^①「大きなシステム」を組み上げようとした。リスボン大地震で自分の弱さをつきつけられた人間は、「強く合理的で、大きなもの」に頼ろうとした。（中略）空間の世界でいえば、超高層建築や巨大なハコモノ建築に代表される「大

きな建築」を媒介にして、ちっぽけな人間と、壮大な世界との間をつなごうとしたわけである。一度、大きさに向かって舵が切られたら、止まらなくなってしまったのである。

2 二十世紀前半の世界は、システムを大きくすることに血眼になっていた。しかし、二十世紀後半以降、「大きなシステム」「大きな建築」が人間を少しも幸せにしないということに、人々は少しずつ気づきはじめた。「大きなシステム」「大きな建築」は、人間を世界とつなぐどころか、むしろ人間と世界の間を割って入って、人間と世界とを切断し、人間をそのシステムの中に閉じ込めるということに、人々は気づきはじめたのである。(中略)

3 空間において、「小さな機械」「小さな建築」は、どんな形で、世界と人間を接続するのだろう。そのとき、まず「小ささ」とは何かを考
えなくてはいけない。「大きな建築」をただ縮小しても「小さな建築」にはならない。百メートルの高さのコンクリートでできた超高層建築を、十メートルに縮めたからといって、ここで見つけようとしている「小さな建築」とは呼べない。「小さな建築」とは僕らにとって、さまざまな意味で身近でとつきやすく、気楽な存在でなければならぬ。そんな小さな、いいヤツ、かわいいヤツを探すときにまず考えなくては
いけないのは、自分が一人で取り扱うことのできる「小さな単位」を見つけることである。「小さな建築」とは、実は「小さな単位」のことなのである。全体の小ささではなく、単位の小ささである。単位が

大きすぎたり、重すぎたりしたならば、小さい自分の非力な手には負えない。(中略)

4 建築史においても、そのような適切な単位サイズを探すことは、中心的テーマであった。特に手作業が中心で、機械を用いることが少なかった十九世紀以前の建築工事において、人間の身体がハンドルしやすいサイズの追求は、最も切実なテーマであった。大きすぎず、小さすぎずというサイズを求めた結果、レンガという、一人で、「A」片手で扱える普遍性の高い建築材料が、普及した。いわばレンガは十九世紀以前の西欧建築というシステムを根本で支えるOSであった。二十世紀にコンクリートと鉄という強力なOSが登場するまで、レンガの人氣は絶大で、中国でも数多くのレンガ建築が作られた。レンガは洋の東西を超えた、開かれたOSだったのである。確かにレンガは身体がハンドルしやすい大きさ、重さであった。しかし、自由に重さを変えることができるレンガがあったらどんなに便利だろうか。ある日、道路工事の現場のポリタンクを見ていて、突然にひらめいた。このポリタンクに、水を出し入れして重さを調整するのである。まさに「重さの変わるレンガ」であった。水を抜いた軽い状態で工事現場に運びこみ、現場に設置してから水を入れて重くし、風でも飛ばないバリケードができ上がるのである。用が済んだら、水を抜いてしまえばいい。水が自由に道にばらまけるというのが、この工事用ポリタンクの賢いところである。その一瞬、工事用ポリタンクと同じ原理を用い

て、「水のレンガ」で建築を作ろうと思いついた。まず、空のレンガを積んで壁を組み上げ、組み上げが終わったときに水を入れて重たくし、壁の上部は水なしで軽くすれば安定するという合理的で気楽な構造システムである。

5 最初に試みたのは、レゴブロックの形をそのまま拡大したレゴ式ポリタンクである。ポリタンクだから、蓋をつければ水の出し入れは簡単である。問題は、ブロック同士の「つなぎ方」である。単位となるブロック同士をどう結合させるかが、このような「積む」タイプの「小さな」建築の難関となる。本物のレンガなら、レンガとレンガの間に、セメントと砂をまぜてこねた、モルタルという接着剤をつめこむ。モルタルが固まるとレンガとレンガは、結合される。石もレンガも、昔からこのモルタルを使って固定されてきた。このやり方だと、確かに固まることは固まるのだが、やり直しがきかないという大きな欠点があった。壁の位置を変えなくなるなんていうことは、人間のきまぐれな生活の宿命で、しょっちゅう起こる。しかし、レンガで積んだ壁を壊してやり変えようと思っても、モルタルで固めてあるとそう簡単にはくずれない。

6 そもそもコンクリートの壁は、そのような取り返しのない存在の極致であった。世の中には、「取り返しがつかない」ことを「強さ」と取り違えて、^③コンクリートでできた巣に依存するタイプの人たちもいる。しかし僕は逆に、その「取り返しがつかない」という強迫的

時間感覚に耐えられなくて、もっと気楽に作っては壊せる「小さな建築」を探しているわけだから、レンガをモルタルでべたつと接着してしまつては、元も子もない。「B」レンガが素手でハンドルしやしい「かわいい」サイズでも、モルタルの接着力が障害となつて、「小さい建築」とは呼べないのである。そこで思いついたのがレゴ式のジョイントであった。一つ一つのブロックに突出（凸）と孔（凹）がついていて、凸を凹にはめこめば、二つのブロックは接合されて、しっかりと固まるという仕掛けである。この要領でどんどん積んでいけば、簡単に壁ができる。壊したくなければ、凸凹をはずせば、もとのばらばらのブロックに戻るだけである。このような「取り返しのつく」気楽なジョイントが、「小さな建築」にはふさわしい。

くまげんご
（限研吾『小さな建築』による）

（注） ○ 1 6 は段落符号である。

- リスボン大地震Ⅱ一七五五年十一月一日に発生した巨大地震。ポルトガルのリスボンを中心に大きな被害が生じた。
- ハコモノ建築Ⅱここでは、公共事業で建設された施設のこと。
- 媒介Ⅱ二つのものの間をとりもつもの。
- 舵^をを切るⅡここでは、方針を転換する。
- ハンドルⅡ扱うこと。

○ OSⅡオペレーティング・システムの略。ここでは、建築の基本的な材料の意味で用いられている。

○ バリケードⅡここでは、侵入を防ぐために設置する資材のこと。

○ レゴブロックⅡプラスチックの部品を組み合わせていろいろな造形をするレゴ社製の玩具。

○ 極致Ⅱここでは、それ以上は行き着くことができない状態のこと。

○ ジョイントⅡ接合。 ○ 孔Ⅱくぼみ。

4

次の古文を読んで、あとの問1から問4までの問いに答えなさい。

(本文の …… の左側は現代語訳です。)

① いにしへより碁をうつに、当局の人は聞くらく、傍観かたはらみの者は明らかな

実際に碁碁をして人

りといひ伝へて、俗にいへる脇目百目② わきめひやもくなれば、人のした事、過ぎ去り

し事を、跡あとからその評判をつけ、立ちかへつて思案をめぐらし見れば、

あとからそのことについての
論評を加え

格別③によき分別も出づるものなり。前にいへるごとく、昔ありし事は、
考え

必ず今もそれに似たる事あるものなれば、古人のし損なひし事に気がつ

いてあれば、今日する事の考へになる事多かるべし。是れ史を学ぶの
多いたろう 歴史書

大利益だいきりやくなり。人君の学文には、史を読む事甚だ当用なる事と知るべし。

君主の学問……

必要な

『不尽言』による

(注) ○ 前にいへるごとくⅡ本文の前に「いにしへにありし事は、今日
の上にちやうど似たる事多くあるものなれば」という記述がある。